

——子どもたちに とどけたい——

うたうよろこび

うたうかなしみ

間中 ケイ子

ぞうさんの道

童謡「ぞうさん」の作詞で知られている、詩人まど・みちおさんは、二〇〇九年十一月十六日で満一〇〇歳を迎えられました。「ぞうさん」のうたは、一九五二年にNHKラジオ『うたのおばさん』で放送されて以来、半世紀以上も子どもたちに愛唱されてきました。阪田寛夫は、著書『まどさんのうた』（童話屋）のなかで、こう書いています。

——「ぞうさん」の歌は、歌い手のうしろにいる作り手の、そのまたうしろにいる詩人と作曲家をも越えて、まだずっとはるかな国から、ようやく届いた贈り物のように思われ

た。（中略）詩と曲が一点の暗さもないよろこびをしずかに表し、そこから言葉だけをぬき出して考えたりはできなかつた。——

確かに、この歌をうたっていると、いつのまにか心がゆったりとして、やさしい気持ちになってきます。何もおしつけることなく、教諭することも誇示することもなく、ただゾウの鼻が、ぶうらりぶうらりするようなる拍子の快い気分なのです。「ぞうさん」は、戦後の子どもたちにはやさしく美しい日本語のリズムで語りかけ、個を大切に作る平穩な世界のすばらしさを感じさせてくれました。まさに「ぞうさん」は、少年詩・童謡の歩むべき道しるべとして、長い道のりを歩き続けてきたといえるでしょう。

二〇〇九年、一〇〇歳を迎えたまど・みちおの新作詩集が、二冊刊行されました。『のぼりくだりの』（理論社）と『逃げの一手』（小学館）。挿画も手がけている『逃げの一手』には、書き下ろし36編の作品が収録されています。あとがきには、「どんなにささやかでも新発見を書かなくてはと思っています。」と記され、マンネリズムに甘んじることのない、詩人まど・みちおの創作の信念に心打たれます。作品「カバシラ」へもう おかえり／じいさんが ひとりだまってるよ／というような やんわりした／さわやかただった（抜粋）を読むと、つかみ所のないカバシラのやんわりとした感触までが伝わってくる、不思議な言葉の魔